

ヨルダンのカラク地溝

TOGO, Masami / 東郷, 正美

(出版者 / Publisher)

法政大学多摩研究報告編集委員会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学多摩研究報告 / 法政大学多摩研究報告

(巻 / Volume)

32

(開始ページ / Start Page)

i

(終了ページ / End Page)

ii

(発行年 / Year)

2017-10-30

ヨルダンのカラク地溝

東郷正美¹⁾

Karak graben in the western part of Jordan

Masami TOGO



写真 1

ヨルダンの中西部、死海低地帯の東側には、中生代白亜紀に生じた浅海性堆積物が削剥されて生じた侵食小起伏面が広く分布する（東郷ほか, 2012）。死海に流入するワジ・ムジブとワジ・ハサの間に広がるカラク高原面もその一部である。1000m 前後の標高を有するこのカラク高原には、その一方で構造的と見なせる直線状凹地帯を伴うという特異な側面もある（図 1）。80 ~ 100m 程度の比高を有する直線状急崖で限られ、2km ほどの幅をもって北西—南東方向に延びるこの凹地は、その地形形態的特徴から“地溝”とみなされ、“カラク地溝”と呼ばれてきた（Powell, 1987 ; ten Brink & Ben-Avraham, 1989 など）。カラク地溝の中程に立って南東方向をみた風景が写真 1 である。写真 2 は、北西部の地溝縁付近で見つけた玄武岩質溶岩の露頭であり、開口性地溝の形成がマグマの地表流出を促したことを物語っている。カラク地溝の北西部はワジ・カラクの河谷を経て死海地溝壁に達し、ここで途絶える。一方、南東方においては、幹線道 5 号線（通称デザート Hwy）を越え、同じ方向性をもつワジ・ブワイージャの長い直線河谷へと連続する。ヨルダンの国土を斜断してサウジアラビア領内へと続くこの長大な開口性構造線は Karak - Al Fiha fault system と呼ばれている（Al Shawabkeh, 1986）。ヨルダンの中～東部には、これと併走した溶岩丘の群列がいくつも形成されている。紅海の開口軸と方向性を同じくするこれらは Red Sea Dike system として一括される（Garfunkel, 1989）。

1) 法政大学 Hosei Univ.

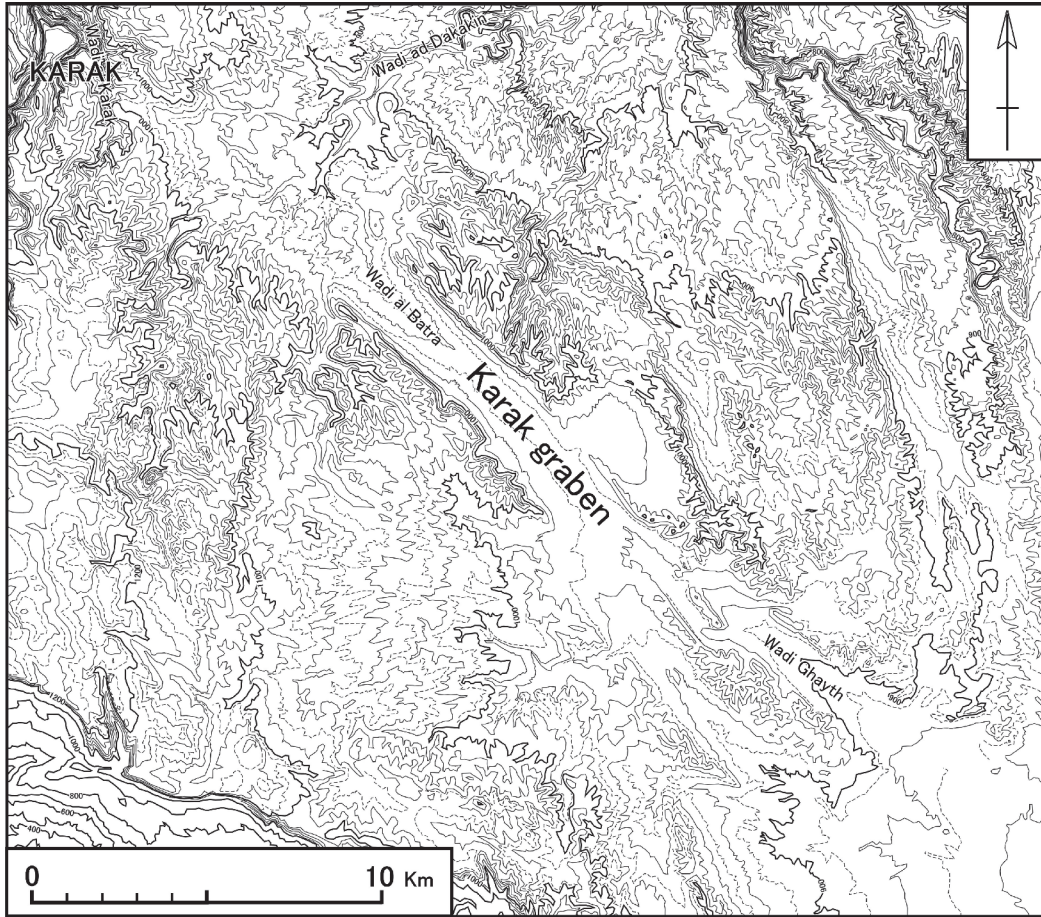


図 1



写真 2